

之多敵乃使

随分前に住宅地を通り過ぎ、数刻も過ぎたが、未だ林の中で目的地は見えてこない。

等間隔に整列する針葉樹の群れは、製材時に節や捻じれの原因となる余計な枝の一切が打ち払われ、下草は鹿に食い尽くされることなく一定の高さに維持されている。

管理の行き届いた林の中は植物たちの吐息で湿り気を帯びて肌を冷やし、生前の遠い記憶にある神社の境内のような、静謐で神聖な空気を孕んでいた。

(楓ちゃんは『黙ってて』って言ってたけど、やっぱり相談すべきだと思うから…)

この時代で最も大きな権威を持つ名家であり、楓との共通の友人でもある乃木園子の実家を目指して、神奈は一人林道を歩いていった。

「……」

平時であれば『園子ちゃん家(ち)は何度来てもおつきいなあ……お家の人たちは迷わないのかな?』などと、目を離すと数十メートル離れた日向で舟を漕いでいたりする『ぼやぼやした聡明な友人』のことを案じながら自らが遭難していたかもしれない。

神奈がモヤモヤと思考を回しているうちにまた数刻が過ぎ、侵入者を拒み続ける背の高い漆喰の壁と大門が姿を現わす。

「着いた…」

神奈はいつもの様に、ギギギと音を立ててゆっくりと開かれる豪壮な趣の門を眺める。

「…どうして上じゃなくて下に楔（くさび）入れるんだっけ…」

二条城をモデルにしているという園子宅の門構えの威厳さに触れるより先に、仕口や日に焼けた木肌の艶を診るようになっていたことに神奈は気付かない。

どこからか乃木園子の声が聞こえてくる。

「お迎えさんが今向かってるから、ちょっと待っててね」

神奈の居る大門からは見えないが、門から凡そ一キロ程度進んだ先に屋敷があり、園子が向かわせたという使用人と車を待つ。その間、手持ち無沙汰なため、楓が神奈用にと用意したスマートフォンにイヤホンを差し、楓が好んで聴いていた楽曲を再生して決意を新たにす。

（…楓ちゃんが返事を返さなくなって丸一日過ぎた…もう待てない）

依り代を楓と共有している神奈が、何故制止を受けずに密会を重ねることができたかといえ、黄泉下りの日を境に周期的に楓の意識が消失していたからである。

当然のことながら楓が意識を失っている間、楓に意識は無い。

楓が気絶している時間を楓が認知することは無く、気絶している者が気絶している自らを気絶中に自覚することも無く、元々間延びした時間感覚を持つ楓は『眠気で意識が朦朧としていただけ』だと思っていたが、既に、楓の意識は浄土から奈落へ垂らされた蜘蛛の糸の如く辛うじて繋がれた状態で、隠し事をしていたのはむしろ楓ではなく楓の身を案ずる勇者たちの方だった。

平時であれば正直者の勇者たちの秘密など半日と持たなかっただろうが、秘密主義者氣質のある楓は、元より詮索を厭う性質で、また自らの秘密を死守するために勇者たちとの対話機会を断っていたため知られることがなかった。

「こんにちわ！ 今日結構冷えますね！ 秋だなーって感じ！」

迎えに来た使用人は何かを言い含められているのか、黙したまま深く頭を垂れる。

異形である義体の姿を見て、万が一にも失礼を働かないようにと囁らわれているのかもしれない。

一抹の寂しさを感じながら車内に乗り込むと、柔らかく沈み込む手触りの良い上等な座席に歓迎され、エアコンから吐き出される独特の臭気を芳香剤が和らげている。車窓を流

れる美しい庭園を含めて最大限の快適さを提供していたが、今の神奈にはそれを楽しむ余裕が無い。

(絶対……何とかしてみせるから……)

楓との仲はまだ半年にも満たない。

しかしそれでも、何者とも関りを持つことが許されず、知覚されることさえ無く、世界が減ぶまで独りで存在し続けるしかなかった自分を見付けて、語り掛け、救ってくれた楓に対して神奈は深い恩義を感じている。

楓の異変を早期に察知した者たちの中から、郡・桐生・園子・雀が主体となって対応策を模索していた。

\*

「いらっしやうい♪ チュン助は少し遅れるって」と園子に屋敷内へと促され、進んで行くくと、入る前にはとても想像できないような趣の廊下が唐突に現れる。

そこにはシミ一つない純白の壁に掲げられた絵画たちは写実的なものから抽象的なものまでジャンルを問わず飾られており、扉から視線を上げれば鹿の剥製、廊下を曲がれば西洋甲冑、足元はレッドカーペットと、内装を洋風にするのなら何故外観を二条城にしたのか、もしくは何故二条城をモデルにしておいて内装を西洋屋敷にしたのか、滅んだ文明文化を忘れないために「よし！和洋折衷にしよう！」などと言う依頼者に対して、宮大工や建設家たちは相手の圧倒的な権力を前に『いや…だからってこれはどうよ…』とツツコミたい気持ち押し殺して手掛けたりしたのだろうか？その統一感の無さに、足を踏み入れたものは思わず家主の趣向に首を傾げてしまうかもしれない。過去からタイムスリップした未来の家主が屋敷内で遭難しかけた話はまた別の機会があればしようと思わない。

数分かけて密会場所である園子の自室前に到着し、部屋の主が扉を開ける。

「待ったでー！カナが居らんことには始まらんからな！」

「私たちが予定より早く到着してしまっただけだから、気にしないで神奈さん…」

反射的に謝ろうとする神奈を先回りして郡が『気にするな』と微笑みかけてくれたので、非常時にも関わらず神奈の表情が自然と和らいだ。

いつの間に用意したのか、熱い茶の入った急須や茶請けを御盆に載せた園子が、テーブルに着いた客人たちに取り分けてゆく。

「それじゃあ、調べてきた情報を出し合おうか」

「私は伊予島さんの手も借りて『脳死判定を受けていた患者が「植物状態だった頃も意識があった」と語った事例』を調べて来たわ」

人数分に刷られた報告書を郡が手早く配る。

「……なんやそれ怖いわ……！ ホンマは意識あるんに、確かめられんから麻酔無しで臓器取り出されたり、火葬されるとこやった。ちゅーことやろ？ 怖わいわー……」

「殆どは西暦の……全身麻痺患者の意識を確認する技術・手法が確立されていなかった頃の話で、対応していた人たちが小さな意思的行動を読み取れなかった事例だけれど、神世紀に入って生命反応を捉える技術が確立されてからも一件だけあったそうよ」

言葉を紡ぐ毎に郡の顔が青ざめ、呼気が乱れてゆく。

「……もしかしたら……彼のことだから……」

これまでの私たちの会話も全部聴いていた可能性もあるわね………知った上で私た

ちに『瞑想しているだけだから』なんて言い訳を用意していたのかもしれない……」

「……大丈夫か？ チー。 顔真っ青やで……？」

「……今この瞬間も、っ、意思表示の手段が無いだけで、意識は……っ意し……ッッ！」

「ぐんちゃん!？」

一度、身体が大きく揺れた。

くの字に腰を折り、強く口元を抑えた郡を神奈が抱き留める。

「……大丈夫………ありがとう神奈さん…… ちよつと、想像してしまっただけだから……」

そう言う郡の肩も、反射的に持っていた資料ごと握り潰した拳の震えも収まる気配はな

い。

「ひとつ確認なんやけど、うっちーは確かに生きとんのよな？」

「うん……この身体の中に楓ちゃんの魂を感じるから、それは間違いないよ」

一呼吸して桐生が続ける。

「そうか………ほな次はウチやな。」

鎬矢は対人のお役目やったつてのは皆知つとる思うけど、お役目柄、昏倒した人間を見る機会が多かったさかい、心肺蘇生術とか救命救護の知識は多少齧つとつてんから、ダメ

元でそっち方面調べてみてんけど。

やっぱ、触ったり声を掛けたり、反応が返って来んでも根気よく刺激を与え続けんのが意識を取り戻す上で大事や。って再確認しただけやったわ。

鎧矢のお役目の経過から読み取れるモンでもないかと、ユミの弥勒伝借りて読んでみたりもしたけど、あんま芳しゅうなくて、神樹様も、うっちーに関しては何も言わん。：ジブンがうっちー呼んだんやろにな」

申し訳なさに桐生が臉を伏せて溜息を吐きだす。

「うん。『たとえ成果が無いように見えても、諦めなくて良いんだ』って分かっただけでも有り難いんよ：私は事態を把握してるのか大赦の人とお話しして、ゆーゆともお話しして来たよ」

「：結城さん？」

「うん。 ゆーゆも状況は違うけど、意識不明になったことがあるからね。

：でも、ゆーゆの話を纏めると『おっきなお目目と、おっきな鏡が一つずつある以外には何も無い、真っ白で、果ての無い世界に居た』ってことだったから、ゆーゆと楓さんは全然違う状況だと思っう：」

思う様に調査が進まなかったと眉尻を下げる。

「それはそれで興味深い話やけど、そもそも、うっちーは生身ちゃうし、氣イ落としはんなや。参考に聞くけども、ユツキーはどないして其処から生還したん？」

「…そうだね、『何処からか判らないけどわっしーの声聞いてきて、何処からか飛んで来た青いカラスに着いたら戻れた』って言ってた。 どういうことか全然分かんないけど、声を掛け続けることはやっぱり大事なんだろうね」

「…大赦の方はどうだったの？」

「神官さん達は知らなかったみたい。」

それで、楓さんが義体制作を依頼した技師さんたちにも聞いてみたんだけど『黄泉下り後に義体の不調を訴えられ、人工声帯の代替機能増設などの依頼を受けてはいましたが、意識混濁の報告はありませんでした』って。

多分、神ゆうゆが知ってる以上のことは何も知らないんじゃないかな〜…」

「予兆があったなら、どうしてもっと…!」

「ぐんちゃん落ち着いて… お茶を飲んで、深呼吸して…」

神奈が懸命に郡の介抱を試みているが、体温の無い冷たい義体と、その中に閉じ込めら

れている楓の存在を意識させてしまい逆効果となっていた。

「あのね……園子ちゃんが話したっていう技師さんとは、私も楓ちゃんと一緒に話したことがあるんだ。『主任さん』っていうんだけど、主任さんは自分の仕事に真剣で妥協しない人で、主任さんが調べて気付けなかったなら、きっとそれは誰にも分からなかったことなんだと思う……」

神奈が静かに諭すが「だからって……こんな……」と郡は受け入れられない。

「一旦落ち着きや、チー。」

植物状態やら、脳死の話やら調べ過ぎて相当ナイーブになっとる」

「彼が今どういう状況に陥っているのか、あなたは私より理解しているはずなのに、随分落ち着いているのね……」

「……普段、うっちーとは憎まれ口か皮肉合戦しかしやらんくせに、ここ一番では誰よりも深刻になんなあ」

慈しむような、寂しげなような、恐れているような、決意の籠っているような、そんな年齢14歳の少女が見せるには複雑な光を瞳に宿して桐生は述べる。

「何度も言うことになってビミヨーな気分やけど、対人の、ちょっとダーティなお役目やっ  
とったさかい『その巫女ってことは』や。」

それは最悪、ウチの指示で、アカナやロックに『人殺し』をさせてまうかもしれん立場  
に居ったってことで、確かに皆より考える機会は多かったやろうし、実感もごつつあるか  
もしれん。言いたいことも、よう分つとる……」

鼻から深く息を吸い込み、数秒息を止めて吐き出す。

「…けど、毎度、今のチーみたいに動揺しとったらお仕事にならんやろ？」

せやからウチは『ウエットなばかりが正義やない』と思うとる」

桐生が、震える郡の手を包み込むように取る。

「いや、ちと自分語りし過ぎたわ。」

「…ちゃんと分かつとる……ただ職業病やさかい、堪忍な……」

郡は心の手綱を掴み損ねている自分を認識してしまい、思わず桐生から目を逸らしてし  
まう。

「ねえ、神ゆーゆ。楓さんの応答が全く無くなったって本当……？」

3人の視線が神奈に集まり、チツ……チツ……と時を刻む音がこだまする。

滞留する重々しい空気に、神奈は言葉忘れて俯く（うつむく）ことしかできない。

誰もが居心地悪く、髪やペンを弄ったり、筋を伸ばしてみたり、意味が無く目立たない最小限の動作を繰り返す。

湯飲みに入った茶も随分前に冷め切っているが、重大な問題が目の前にあるにも関わらず、それに関係の無い行動を取っても良いものかと罪悪感に似た感情に支配されて、茶を入れ直すために立ち上がることができない。解（こたえ）を出せず、膠着状態が続く。

「どうすればいいんだろう……」と誰かが小さく呟いたが返事を返すものはない。

神の声を聞く巫女にも。

神の力を宿す勇者にも。

世界を救い、神に成りかけた少女にも。

世界を救い、神霊として三百年在り続ける少女にも。

彼女たちができることなど何もなかった。

救世の力があつたところで大切な友人を救えない。

何かを成すには、技術や体力を振るい『必ず実現させる』という堅い意志と、必要なものを知り得るための正しい知識と幸運が必要だ。

しかし相対するは、現時点で正しい知見など存在していない未解明の未知である。

未知に対して、できることは限られる。

精密検査と対照実験を繰り返し、近似事例を精査し、予想外・盲点を削るために、ありとあらゆる事象を観察し読み解くことで世界に対する解像度を昇華し、対象と場を含めて可能な限り正しく俯瞰し捉えられるようになることくらいしか人類にできることはない。

『どれだけやっても、幸運が無ければ、不測の事態ひとつで何もかもを失い頓挫するし、如何にもならない』ということをお願いするだけかもしれない。

神奈は、ふと「私は何者も救えないし、私を救えるものも存在し得ない」という楓の言葉を思い起こす。あの言葉はどういう意味だったのだろうか？

三百年前の神奈は勇者だった。

だけど友達を殺された。

壁の外の人々を化物に食い荒らされた。

思い出の場所を滅茶苦茶にされた。

仲間が殺された。

親友に孤独を与えて死なせてしまった。

最後の戦いでは敵の圧倒的な力で骨は砕かれ、武器を振るう腕は装束によって原型を留めて見えるだけの肉塊へと変わり、切り札の代償も重なって心は折れかけた。それでも背中を任せた仲間を信じ、愛しい人々を護るために神奈は折れなかった。

『いつかは、天にも手が届く』と、高嶋友奈は信じて諦めなかった。

そんな自分に対して楓はどうだろうか？

『自らが行うことは必ず最期は台無しに終わる。報われたことがない』という楓の言葉は「私が私である以上、私は救いようがない」と締め括られていた。

彼は自身の絶望的な天命に絶望しないために、全てに失望しながら、それでも諦めることはしなかった。彼は努力が結実することを信じていなかった。

機能不全家庭に被虐待児として産まれた楓には、家族と呼べるものは無く、学校では虐めを経験し、成人後も友人や恋人は無く、頼りにする仲間もいなかった。支えになるもの信じられるものも、守るべきものも無く、どうして諦めずにいられたのだろうか？

例えば現状を把握できないほど愚かだったとか、樂觀的な性格だったとか、刹那的な享樂主義者だったとか、怪しい宗教に傾倒していたとかだろうか？

そうであれば、分からなくもない。

しかし、その仮定は成り立たない。

確かに彼は、天の神から人類を庇護するために顕現し、国教の主神ともなっている神樹を敬わず、仏教徒を名乗る傾奇者（かぶきもの）である。

しかし彼が師事する高僧などは居らず、部屋には聖典の類も無い。

享樂的な人間が、物を食えず・酒を飲めず・自慰もできない身体で、ギャンブルに溺れることも自害することもなくいられるだろうか？

彼は自身のことを『知ったような口を利くだけで、何も知らない』と自称していたが、好奇心は強く、知らぬを知ること面白さを感じることができる人間だった。

学習意欲と言い換えられるそれを持つ彼が、自身の実情を把握できないほど無知識でいられたのだろうか？

スマートフォンバイブレーションが、三人に雀の到着を知らせる。

夕日に染め上げられた空に、カラスの声と乾いた羽音が広がった。

部屋にはチームを効率的に運用する才能も、物事を探求する辛抱強さも、好奇心と天性の閃きも、人類の活動の全てを三百年眺め続け、少々の縁なら引き寄せることさえできる神霊も居て、それでもまだ足りない。

『知っていること』と『理解していること』は異なり、また、理解しているからといって干渉できるとも限らない。

神奈は不可思議な楓を参考に、行き詰った現状を打開できないかと記憶を探ったが、楓の精神性の不可解さが際立つだけだった。

園子が加賀城を迎えに部屋を出る。 沈黙。

「あー！もう！アカン！ 限っ界！！ 空気重すぎて吐きそう！」

桐生がドタバタと勢いよく窓を開け放つ。

「すうー、はあああ……」

「園子ちゃんが戻ったら何か気晴らしでもしよつか、ぐんちゃん」

一人が動いたことを切っ掛けにして、澱んだ空気が入れ替えられる。

「…そうね。」

今の私達にできることなんて、彼に刺激を与え続けて覚醒を促すくらいなもの」

「あー：そうや、チーが言うと思った『生命反応を捉える技術確立後も一件だけあった』てやつはどうなん？」

「：消えた魂の反応が復活したということだから、検知器の故障か、彼のように黄泉帰りしたということなのか：一件だけの事例では研究するまでには至らなかつたみたい」

郡は神奈の手をニギニギと弄び続けている。

「手詰まりかー：あー……：そもそも魂とか神様とかつて何なんやろなあー？」

死後の世界があんなら、死後の世界で死んだらどうなんや？

それともあっちでは、みんな不死で永久不滅なんやろか。

世の中は分らんことばっかりやわ：頭脳労働ホンマしんどいー……」

半ば投げ遣りに黄昏ている桐生は、神の言葉を伝える巫女の一人である。

自らの脳内に一方的に情景を流し込んでくる人知を超えた存在に、以前から思うところがあつたのだろう。

誰に問いかけているでもなく、得体が知れず如何にもならないものを前に、人類の矮小さを溜息に浮かべて吐き捨てる。

「あなたも相当疲れてるわね……」

「それなー。うちーとはドライな関係のつもりやっけてんけど、実際に居らんくなってまうかもしれないなったら、これが全然割り切れんのよ。やっぱり漫才友達が居らんくなるんは淋しいわ……」

「うん……」

「うんうん。最近は桐×楓の、リズムカルな夫婦漫才の需要が——」

「園子さん………いつ戻ったの……？」

足音も扉の開閉音も立てずに、郡の視野の隅っこで湯気を上げる茶を啜っていた。

「ふう……勝手知ったる我が家……？」

「どういう意——」味だど郡が入れようとしたツツコミは来訪者によって無残にも切り裂かれ『そういえば園子さんは彼女を迎えに行ったのだった』と、部屋の外から聞こえてくる悲鳴で思い出す。

「園子さん何処に行ったのー!? 独りにしな

いでよおおー！…っていか園子さん家広すぎだから！

方位磁石とGPS使ってるのに自分が何処に居るのか分からないってどういうことなの！？ 家の中で余裕で遭難する広さって…！ ああああん！ 誰か助けてメブー！！」

「不特定多数と特定個人と、どっちへのSOSやねんスツズw」  
遅れて到着した加賀城を出迎える。

「ああつ静さん…!? 園子さんも居るっ?! もー…！ どうして私をほっぽり出して消えちゃうのー…行き倒れるところだったよお…」

「ごめんね、チュン助く。」

気付いたらチュン助が居なくなってる、私もびっくりしたんよ〜」

「どうして『私が一人勝手に消えて迷子になってた』みたいになってるの！ 窓の外に一瞬目を逸らしたただけなのに、前を歩いてたはずの園子さんが忽然と消えたんじゃないか…！」

「…ほんまソノは神出鬼没やなあ」

「え〜？ そんなことないと思うけど〜」

温かく、心を落ち着かせる香りのする紅茶と、甘い茶菓子をつつきながら情報交換が再開される。

「あっ、このマドレーヌ美味しいー♪ 華やかな香りの紅茶と相性抜群♪ こっちのクッキーもサクサクで幸せー♪」

「…お菓子も良いけれど、本題を忘れていないかしら？」

加賀城のお陰で先ほどまでの空気が嘘のように弛緩してしまい、郡の表情にも幾分か余裕が戻っている。

「……………ハイ……………」

「ど、どうしたの雀ちゃん？」

「……………にも……………け……………でした……………」

「…なんて？」

「加賀城さん……………？」

顔に影を落とした加賀城が、すすり泣く様に言葉を絞り出す。

「ひぐっ……………」

ヴヴっ…なにもっ……………何も見付けられませんでした……………ごべんなざいつ……………」

「大丈夫だよ雀ちゃん…！ みんなで力を合わせればきつと… 泣かないで…」

「さっきまでのテンションは逃避だったのね…」

あなたが危篤状態の彼を前にして『幸せ』なんて言うと思ったら、そういうこと……」

「まあでも、しゃーない、しゃーない。 勇者や巫女や言うても、それ以外はただのJ.C

やし、神様にだって出来んことの10や20あるやろ。切り替えてこー」

「ええ…楽観視はできないけど、できることをやるしかないわ」

「せや…!! 深い眠りから目覚めさすには、愛する人からのキッスと相場は決まっとる！」

「おおうっ!! 確かに確かに、然り然りて、誰が楓さんにブチュっとするかの権利を巡って今戦いの火蓋が切って落とされるー!!」

「罰ゲームね…」

「おんやあ? じゃあ、チーちゃんは棄権ですかな〜?」

「そうね」

「そっか。でも楓さんの意識は無いし、身体は義体だし、神ゆーゆーたかしーだし

〜?

実質たかしーとのファアスト・きつす……!の権利なんだけど、チーちゃんは棄権か〜」

「んなっ…」

「このことを、たかしーに話したら『自分自身とならノーカンだし、申し訳ないから私が』って名乗り出ちゃうかも〜?」

「なんてことをっ!!」

「ねえ、ちよっと待って? 今シリアスシーンだったよね? なんでもうギャグ空間になってるの?! 役立たずの私には、満足に落ち込む暇さえ与えてもらえないの!?! いや、何の情報も用意できなかったのは私が悪いんだけどっ!」

「くっ……高嶋さんが……高嶋さんが……死守しなければ……でも……ああどうすれば……!!」

「喉けた(けしかけた)んはウチやけど、ソノの煽りはホンマ鬼やわあ……」

「フッフッフ、長年のイベントーとしての経験が活きましたなあ……」

「はっ?! そうよ、義体にキ……sの感触を味わえるなんて無駄なセンサーは備わっていない! だから前提がそもそも間違っているのよ!」

「これは物理的・医学的な手段が手詰まり感あるから、呪術的な儀式として提案しとるん

やで？ 人の命が掛かるとときに、人工呼吸を躊躇っとしたら助かるモンも助からん。

勇者がそないなこと言うてエエンか？ ウチなんか間違ったこと言っとるか？」

「うわ、キスを人工呼吸にすり替えて正論を振りかざすとか、静さん凄い卑怯」

「ちなみに、神ゆうゆは義体を依り代にしてるだけだから、機械的なセンサー類に依存せず人並みの触覚が有るはずだよ」

「グヴヴヴヴヴヴー！！！！！！」

「ひぎいっ?! 千景さんから放たれる殺気にも似た限界の葛藤が私の全身を貫いてくッ!？」

「わあああ、ぐんちゃん落ち着いてーっ?!」

「フフッ……いいわ。高嶋さんのファーストキスを守るためなら、身売りでも何でもやってやる……フフフフフフフ……」

「怖い怖い怖い怖い怖いから!! 殺意の波動に目覚めてるから! 千景さんの視線で、罪の無い弱いチュンチュンの心臓が巻き添えで音速でマッハだからあっ!!」

「……なあ、ちょっとやり過ぎたんちゃう……?」

「……………てへ?」

郡の装いが勇者服に変わり、右手の大葉刈が怪しく光を放つ。

「そうよ……この話を知っているのは、ここに居る人間だけ……」

「いいいやああああ!!!!!!口を封じられるうううう?!?!?!」

「ソウ……加賀……ジョウ……?」

うるさくて目を開けるとカガジョウが私の背中に張り付いていて、視線で人を殺せそうな眼光で郡さんが園子さんを睨みつけていた。……またなんかやらかしたのか?

「氏紙さん!?!」

「目エ覚めたんか!?!」

「オ オウ……ドーシタ?」

郡から殺気が霧散する。

「……貴方があまりにも起きないから、ちょっと叩き起こして上げようと思っただけよ」

【精密機械を勇者の力で叩こうとしないでください 死んでしまいます。】

機械の調子が悪いからちよつと斜め45度で叩いてみようとか、そんな目じゃありません

んでしたよ。

「分かってるわよ…」

「私が悪乗りし過ぎたせいなの。チーちゃんを責めないであげて〜…」  
「せやなあ…ウチらが悪かったわ…すまんかったなチー」

「ハジメカラ セメル ツモリ ナンカ アリマセンデ シタヨ」

「氏紙さんの片言で緊張感が…」

「誰ノ 存在ガ ギャグヤン」

加賀城が目を背けて小刻みに震え始めた。

「ぶっふあ!! なんやねんそれ、お腹痛い…!!」

「ジャア… ネムイ ノデ…」

「え、ちよちよちよい待ちい! ジブンが今どない状態なんか分かつとんか!?」  
「氏紙さん!」

再び眠りに墮ちようとする楓に視線が集まる。

「冗談じゃないわ！ 起きなさい!!」

郡が楓の肩を揺らす。

【予ていにへんこうは無い。じゅかい化したら黄泉に送れ。】

「楓さん…何か当てがあるの？」

楓は答えない。

「楓ちゃん…？」

楓は答えない。

「なにか…：言いなさいよ…：」

楓は答えない。

「息も脈も瞳孔反射も無い義体相手じゃ、意識の有る無しはおろか、ホンマに生きとるんかも判らん。困ったモンやわ…：」

腕を組んで桐生が顔を顰める（しかめる）。

「そくだ…：思い出した。楓ちゃんの『後悔しないための6カ条』…：」

- ・ できることをできるだけ行い
- ・ やるからには徹底的に、殺す気で行い
- ・ 変更を含めて、道の選択は可能な限り早く決断し、
- ・ 質に取られないために、何かが無くてはならないという状態を虱潰し、
- ・ 可能な限り公正に、己に誠実に、そして矛盾無く、
- ・ 己の大事のために役割に殉じる。

(そっか：楓ちゃんにとって、諦めるとか諦めないとかは関係ないんだ……)

『自分はそういう役だ』って決めたら、もう動かない：言葉が届かない：

できるも、できないも関係ない。『自分はソウイウモノだからそうする』それだけ……』

乃木園子が続けて要約する。

「良く言えば意志が固い。悪く言えば、独善的で融通が利かない。

逆に役に係わる大事以外はどうでもいいことだから、ユルユルで寛容的にも見える。

そう在ることで意志に介入できるものを排してきた楓さんは『大事』と『大事じゃな

い』の境界が明確だから躊躇わないし迷わない。

決意して、覚悟してしまっているから、どんな結果でも後悔しない。

そういうことだよな？ 神ゆうゆ」

「うん：」

「…そんで？」

「楓さんは『黄泉へ送れ』って言った」

「：つまり、出来得ることを徹底して試す彼が意識が戻らないことを想定して、確実に黄泉へ下れるように言葉を残したのには意味がある：で良いのかしら？」

「楓さんが解決策を見付けているのかまでは分らないけど」

「おっしゃ！ そんなじゃもう、ウジウジするん無しな！」

桐生がパンツと拍手を打ち、陰気が祓われる。

「できることをできるだけ…：私も頑張るよ、氏紙さん…！」

「まあそも、うちーが初めっから全部説明してくれとつたら、こないみんな思い詰めること無かったんやけどな！」

「本当に世話の焼ける自称四十路ね…」

「ぐ、ぐんちゃん…」

少しずつではあるが、それぞれに明るい表情が取り戻される。

「よし！ 早速私も『第一回、楓さんの愛と唇は誰の手に武闘会！』の準備に取り掛

「それは止めなさい」…しょぼくん」

「こうして惨劇は未然に防がれた…」

「あはは…」

＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝



—そろそろ起きてくれないかな—



「話が進まないよ」

「どうか運ぶのがめんどい」

「お腹空いた」

暗闇の中で誰かの声がして、目を開けると、そこは暗闇の中だった。

「おはよう。ここは黄泉路だよ」

黒衣に身を包み、仮面で顔を隠した誰かが私を背負って歩いている。

「これから君は死ぬ」

それは私がまだ死んでいないということだろうか？

「ああそうだ、起きたんなら自分で歩けるよね？」

そう言っただけで背中から静かに降ろされる。

…この何者か以外に見えるものが何も無く、真っ黒で何もかもが見えないため少し身構えたが、どうやら地面は在ったようだ。立つことができる。

「私のことは店長でも、誰かさんでも好きに呼ぶと良いよ。ああ、舌切られてるんだっ

け？ まあいいか」

話しかけてきたかと思えば唐突に自己完結して終わった。

店長…？

ここは黄泉国ではないのか？

前回とはルートが別ということなのだろうか。

「私は、異界旅行会社を趣味で運営している君のあったかもしれない姿の一つだよ」  
本当に唐突に話し出すやつだな。そして質問は無視か。

「まあ、君の都合の良いように解釈するとよいよ」  
会話しろ。

「あゝるゝきゝつゝづゝけゝて♪」

何だこいつ……

「あつとそうだ。私は私で、君も私だけど別個体で、エスパーでもないからね。

君が何を考えているかは分からないよ」

なんだ、そうか。

「なに、ワロてんねん」

本当に何だこいつ……笑ってないし……

「……」

「……」

いや、なんか喋れよ：何しに出てきたんだよ：景観も何も無い黒一色の空間で無言で歩くなよ：喋れない相手にこの暗さで語り続けても反応が分からないし、人形に語り掛けるみたいで気乗りしないだろうけど、それでも経緯とか、状況の説明とか、なんか話すべきことがあるだろうよ……

「まあ、死なない程度に頑張れ」

今から死ぬつつた相手に何言ってるんだ、御前は。

「ここ下り坂だから足元気を付けてな」

何処だよ、見えねえよ。

「腹減ってない？ 黄泉の釜飯弁当ならあるけど」

殺す気か。

「ほんと暇だな。もう、めんどくさいから、君一人で逝ってくんない？」

路頭に迷って黄泉にも逝けずに死ぬわ。死に切れずに死ぬってどういうことよ。

「じゃ、着いたから、後はあちらさんに聞いてな」

いやいやいやいや、何も景色が変わってねえよ。何処だよ。自由過ぎるだろ御前。

そもそもどういう存在なんだ、御前。

「あー：そうだ。

世界線を変えずに過去を変える方法があるんだけど知っているかな？」

だから脈絡よ……………

：一度宇宙の因果に取り込まれたら、逃れる方法は理論上無い…と思う…たとえ時間を遡ることができたとしても、それはその逆行を含めて現在が存在しているということに過ぎず結果は何も変わらない。はず。

神が不能を含めた全能で完全な存在であるには、宇宙の外側に居なければならぬのと同じで、過去を変えたければ改変する対象宇宙の外側から、かつ、結果を観測する前に目標の時間に介入する必要がある。

だから多くのタイムリープものは世界線を移動するんだ。

変えたい時間を経験しているから過去を変えたいと願うのに、その過去を変えるにはその過去を経験してはいけない。

過去に干渉する技術・技能があれば過去を変えることはできるだろう。

ただし『変えたいと願った過去（観測している・経験している過去）は変えられない』。この前提を覆すことが不可能だから、どの作品の主人公も『過去を替える』ことで自分を誤魔化す。原理的に如何にもならないから、思考に蓋をして気付かない振りをする。

実に空虚で悲劇的で、いっそ喜劇的とも謂える。

まあ、観測者にとって、世界とは主観の中のみ存在し実在するものなので、主観であり主観に於いてしか在り得ず、究極的に主観でしかないのが世界なのだから、世界とは即ち自己と等価であり『どの過去を正史と観測者が認知するか、若しくは並行する世界線の移動過程も含めて一個の正史（世界）と捉えるか』という認知によって『世界の改変は完了した』と謂うことも可能だ。

しかしそれ即ち『世界（自己・主観）を騙している』ということに他ならないわけで。欺瞞を許さない私には承服できない。

「まあ、時間座標的には過去とは謂えないかも知れないけれど、私たちにとっては過去だよ」

何が言いたいのか。

「君は勇者たちが殺される記憶があるんだよね？」

それがこの世界線の出来事かどうか、確認したいと思わないかい？」

思わない。確かめたところで意味が無いからな。

「まあ、君がそうしなければ、天の神を打倒する未来に繋がらないわけだけど」

何を言っているんだ…？

「分からないかな？ 確かに君が存在する時点で、何れは君が居た『天神を打倒した時

間』に繋がるだろう。けれどそれは一体君が何周した後を訪れる未来なんだろうね？」

どうして私が逆行する前提なんだ。それはおかしいだろう。

そもそも天神に滅ぼされた先に未来など無いのだから、もし手段があったとしても移動するタイミングが無いわ。

「今向かっているのは黄泉の国であり、異界であり、異世界であり、干渉可能な過去とは即ち、己が囚われている宇宙（時空）から伸びる因果の外側でなければならぬ。」

そこで仮にあらゆる宗教の死後世界が同一の場所を示しているのであれば、黄泉国は黄泉国であつて黄泉国ではない。

もつと直接的に例示すると、アイヌの死後世は現世と時間の進みが異なると言うね？

仏教の地獄は如何だったかな？」

……いや、だとしても、

『「自分の世界の勇者たちが救われるわけではない』。

確かにそうだ。この方法では君が直接的に彼女たちを救うことはできない。

けれど、君が一つでも救済の実績を生成することができれば、異世界線から遣つて来る自分が彼女たちを救う可能性を創造することができる。現に私という前例もある。

私たちは無力で、何を行つても必ず不運に潰されるし、広く共感を生み、多勢を協力という名の元に扇動するだけの豊かな感受性も無い。

だから私たちは一人の私達として前例を積み重ね、不運とか運命とかそんな名前の神に對抗する。なんなら、試しに一週目は何もせず全員を見殺しにしてみると良い」

……つまりなんだ。結局私にどうしろと言っているのか？分かん：

いや…そうか、こいつはまだ救えていないから、何をすれば良いのかまでは知らないのか。少なくとも何もしなければ敗北する前例が存在し、黄泉を経由することで時間か世界線かを移動可能で、こいつが異世界からの私の来訪の可能性を担保し、勝利の可能性を私の存在が保証しているということか。

…まあ、元より『できることを、できるだけやる』つもりで、死んだり黄泉帰ったりしているわけで。過去改変を行うかどうかは兎も角、話には乗ってやろう。

「…問題は最初の…ただけど…」

「今度こそ本当にお別れだ。私は、次の私のところへ同じ話をしに行くよ」

前例を増やし続けて、虚無に等しい可能性を上げるのな。

「何れは目的地に届くと判ったのだから、飽きるまでは続けるよ」

まあ、私のことだから、もう5回も廻れば止めそうだが。

「移動の方法はイ濁点名◎から聞き出せな」

「ではの」と手を振って、その私は闇に溶けていった。

私は私と別れた後、漆黒の地面の一点に火が灯っていることに気付く。

小火（しょうか）はヂヂッと静かに地面を焼いているが、照らされているはずの地面は依然として闇の中であり興味深い。

光を全く反射しない材質ということなのだろうか？ 分からない。

あの私は『この場所は黄泉路であり、黄泉の国へ向かっている』と言っていたが、私が知っている黄泉の国は地下洞窟に喩えられる程度には理解の易しい場所であり、こんな、近いも遠いも、在るも無いも分からない無反射物で構成された謎の空間などではない。

地面？に手で触れてみても……硬いような……柔らかいような……

触れているようで触れていないような、良く分からない感触が返ってくる。

爪で突いてみても、爪はカチカチと鳴るのに、地面からは衝突音が発せられているようには聞こえない。

もう一度、右手を地面に充てながら近くを突いてみたが、右掌に振動はやって来ない。爪を立てても引っ掛かりは無く、指で擦ろうとしても、摩擦と謂えるほどのざらつきや

滑り難さすらない。

これはまるで……そう、磁石の反発を思い出す。

一定の領域が磁力のような力場で満たされ、強力に反発することで構成された不可侵領域により、地面というよりは壁のようになっていて？ みたいなの。

だが、そうなると摩擦係数0の地面ということになり、歩くどころか立っていることも不可能なはずで何というかも物理法則が滅茶苦茶だな。訳が分からない。

この火も謎だ。

一体何が燃えているんだ？

火の中に固形物は見当たらないが地面が燃えている風でもない。

トーチランプの様にガスが噴いているとしても火勢が不可解である。

さて、どうしたものか……私の身体は灯りを反射しているので、荷物でもあれば目印に置いて探索しようも無くは無いのだが、何故か持っていた愛用というほどでもない雑務用剣鉈が一本あるだけだ。

浮遊感。

ところで、考え事をするときに特定の癖というか動作を行う人々がいる。

例えば特定の位置に視点を移動させたり、人差し指を立て、くるくる回してみたり、ペンを回してみたり、エア轆轤（ろくろ）を回してみたりするあれだ。

実際にそうすることで思い出し易くなったり、考えが纏まり易くなったりするので、私もそういった規定動作を幾つか持っている。

いつもの様にその一つを行って、この空間の既視感に気付くことができた。

ここは確かに身に覚えがある。

けれど道を行ったり来たり、グルグルうろろうろ歩き回るうち、視認不可能な漆黒の地面に開いた漆黒の穴だか崖だかに私は落っこちた。私は奈落の底まで一直線に死ぬ。

…まあ、どうしようもない。

死ぬしかない。

距離や位置を把握可能な物体も何も無く、落下物に対して相対的に吹き上げる風と浮遊感のみが在り、形の無い死の気配が頭の中で怖気を放つ魔物へ転じ、私の精神を握り潰そうと薄目で嗤っている。

万策尽き、絶体絶命。万事休すバンジージャンプ。

などと、しょうもない妄想を捏ねる程度のことしかできないことがない。

見えないから着地の算段なんて立てようも無いし、見えたところで滞空時間的に既に即死かミンチ以外の結末は無い。

…本当に。本当に、あの瞬間と重なるようだ。

全身を灼熱の空気に焼かれ、肉の萎縮と水分の蒸発による眼圧上昇に耐えられなくなつた目玉が弾けて、暴風により散弾銃のごとき殺意を宿した砂礫を浴びて腕は裂け折れ、膝は碎かれ、鼓膜は破裂し、訳の分からぬまま天から地へ叩き落されて死んだ、あのときのようにだ。

スツと気が遠のくのを、冷や汗で冷たくなつた拳を固く握りしめて堪える。

油断すれば意識が先に落ちてしまう。

気絶したまま地に身を落とし、命を落とし、終わってしまう気がする。

足元が落ち着かない。

苦しむ暇もない一瞬で絶命するのだから想定する意味など無いのに、無意識的に膝を突き破って胸に刺さる自身の脚や、潰れてぶよぶよと揺れる顔面だったものや、折り畳まれる脊髄等から齧される致死性の痛みへの不安が脳裏に映し出され明滅している。

私は死ぬ。

今度こそ、二度と目覚めない完全な死が訪れる。

約束果たせず、望みは届かず、愛する勇者たちに不幸を齎し、種どころか骨の一片さえ残せず無意味に終わる。どれほどの好機と幸運を得ても取りこぼす。結局私はこの程度の者なのだ。

何も成せず、何も得ない。

死ぬことさえ自由にならぬなら、この命すらも私の所有物（もの）ではないのだろう。

何も所有しておらず何も得ることがないのなら、最早私は何も奪われず、何も失うことはない。

そしてきつと。彼女たちは、私が死んでいるのかどうか判別付かない限りは諦めることができない。諦め、自らの気持ちに整理を付けることが許せない彼女たちは、これから死ぬまで私の空蟬に縛られ、苦しみ続け、生き続けるのだろう。

諦めないことは美点だが、諦められないことは妄執であり呪いだ。

何かを始めるときは、同時に、止める基準を設けて置かなければならない。

でなければ引き際を誤り、泥沼で藻掻くだけ藻掻いて体力と時間と資源を浪費し、結局何も得られなかったと絶望することになる。

負けが込んでから『諦めが肝心』などと言っても、もう遅いのだ。

まあ、仕方がない。

今更彼女たちにしてあげられることは何も無い。

最愛の彼女たちを地獄に叩き落してしまっても後悔しない私は薄情だろうか。

罪悪感に苦しむだけでは裏切りのようなものなのだろうか。

私のせいではないが、生まれて来てしまったことを申し訳なく思う。

爪先、指先、鼻から耳と、ギンギンに冷えて来て、凍傷を負い始めた皮膚が、火に炙られるように痛い。

体温を得ようと懸命に指を屈伸させてみたが効果は無いようだ。

……気を紛らわせ続けるのも、最早限界だな……

願わくば、私など初めから存在していなければよかった。

生まれなければよかった。

出逢わなければよかった。

せめてあの子たちの記憶から、私の存在が速やかに抹消されることを願う。

それも駄目なら、どうか私への認識を邪悪で有害なものと改めて焼き棄ててほしい。

塵に過ぎない私のことなど、劇的で麻薬にも似た現実にも似た押し流されてしまえばいい。

思い出さず、存在を認識さえしなければ、その記憶は無きものとなるのだから。

\*\*\*

そして氏紙楓は意識が絶えるまで己の誕生を詫び続け、神への呪詛を紡ぎ、最愛の勇者達に呪いだけを残して生涯を終える。

独りに生まれて、独りでに生き、孤独に死んだ。

看取るものなど無く、その訃報を知らせるものさえ彼には無かった。

最愛の人々に出会った幸運は、彼の生涯を幸福にしたのだろうか？

つかの間の幸せは、大きな不幸の為に用意されていただけなのではないか？

報われず救われず苦しむだけの人生なら、生きる価値など何処にある。

後悔しないからといって過去に苦しまないわけではない。

彼は自らを生存させるために、あらゆる観念を破壊し、妄執を棄却し続けた。

歪で異質な人格形成に至った彼は、最愛の勇者たちの中にあっても疎外感から逃れられず、彼が彼であることで人の世に居場所を無くし、後ろ髪を引かれず進み続けたために帰らぬ人となった。

考え得る最大限幸福な環境を与えても彼は救われなかった。

彼が救われるには如何すればよいだろうか。